



シンポジウム 社会学 v.s. 建築 v.s. アート いま「空間の自由」を問う - 社会 / 建築 / アートの交点 -

2006年9月2日(土) 14:30~17:30 せんだいメディアテーク 1F オープンスクエア

目次

1. はじめに
2. シンポジウム要旨
 - 1) 「空間管理」のパラドックス
- 「安全」を囲い込めない住空間-
 - 2) 空間の実践
 - 3) 「パラドックス (概念)」から
「トレードオフ (現実)」へ
3. パネリスト略歴
4. 学際研究会*1
5. 関連出版企画

「パラドックス (概念)」から「トレードオフ (現実)」へ

人類の歴史を見ると困難な問題に向き合ってきた地域や民族が将来の覇権を握ったことがわかる。集約的に米を増産し土地を奪う必要の無かったモンスーンアジアよりも、過酷な自然環境で麦を育て、人口を維持するために外部を侵略せざるを得なかったヨーロッパから、帝国主義経営のアイデアが出たことも興味深い。また西方キリスト教がイエスの位置づけのために行った数々のレトリックの醸成過程で、情報収集とアーカイブシステムの絶えざるイノベーションを行ったこともその成功を裏づけている。

ひるがえって我々日本人は、明治以降列強と対抗するという必然性から不慣れな中央集権 (優れたOSを要す) を導入したものの、第二次世界大戦において付け焼刃OSのままで憤死する。その後冷戦という環境にも恵まれ、奇跡的にもものづくりの力を駆使して復興したが、敗北の真相追究を棚上げし、OSの書き換えを怠ったわが国は90年代に西方キリスト教社会の前に二度目の大敗北を喫した。このように信じがたい物理的、精神的な大敗北を何度も経験しながら日本は奇跡のように世界に存在し続けているのはなぜか?

それは「郵便貯金」と「サブカル」という二つの特異な情報形態を「日本的個」が保有していたことによると私は考えている。この未知なる微細OSが遺伝子レベルにインプリントされている日本人は、官のレベルでは最低の国家ながら民のインモラルな力では最高レベルに達していたのである。理系と呼ばれるテクノロジーの創造者の多数がロリ遺伝子を保有しながら武器の代わりにガンブラに熱狂することも、人類の戦争抑止システムにとって有効なひとつであるとノーベル委員会は認知すべきである。*小林よしのり氏と村上隆氏は種々の意味で興味深い検証対象ではあるが・・・

今回のシンポジウムでは「パラドックス」から「トレードオフ」をテーマに、プロパガンタではなく柔軟なチューナーとして調停を繰り返す自作を中心に、高密度情報化社会におけるアートの振る舞いを語りたい。

椿昇 (つばきのぼる)

主催

関西学院大学 21世紀 COE プログラム
せんだいメディアテーク

